

日本博総合推進会議（第1回）

議 事 要 旨

○日 時：平成30年12月26日（水）16：20～17：00

○場 所：官邸4階大会議室

○有識者：小林委員、小松委員、島谷委員、高階委員

○政府等：安倍内閣総理大臣（議長）、菅内閣官房長官（議長代理）、野上内閣官房副長官（議長補佐）、櫻田東京オリンピック・パラリンピック担当大臣、平井内閣府特命担当大臣（クールジャパン戦略）、柴山文部科学大臣、西村内閣官房副長官、鈴木外務大臣政務官、工藤国土交通大臣政務官、杉田内閣官房副長官、古谷内閣官房副長官補、宮田文化庁長官、平田内閣官房東京オリンピック・パラリンピック推進本部事務局長、田端観光庁長官

1 開 会

2 議 事

（1）日本博について

（2）意見交換

3 総理発言

4 閉 会

（司会：野上内閣官房副長官）

1 開会

冒頭、野上内閣官房副長官から、以下のとおり説明があった。

○去る6月の「日本の美」総合プロジェクト懇談会において、津川雅彦座長から、世界中の人々が日本に来て、全国各地で「日本の美」を体感する企画、「日本博」開催の御提案をいただき、安倍総理から、文部科学省・文化庁が中心となり、関係府省と連携し、万全、万端の態勢で進めるよう御指示をいただいた。

○「日本博」の成功のためには、出展交渉や広報など多岐にわたる活動が必要となることから、関係府省等が一体となって取り組むことが必要である。

- また、民間の発想や視点をいただきながら、広く国内外の多くの方々に我が国の文化芸術の魅力や素晴らしさを感じていただけるものとする必要があり、官民が一体となって進めることで、効果的で、効率的な開催が可能となるものとする。
- このため、この会議においては、資料1の設置要綱にあるように、安倍総理のもとで、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の機運醸成や訪日外国人観光客の拡大等も見据えつつ、日本の美を体現する我が国の文化芸術の振興、そして、多様かつ普遍的な魅力を発信する「日本博」の具体化及び開催準備等に係る御審議をいただきたい。
- 委員の皆様方には、忌憚のない御意見を頂戴したいと考えているので、御協力のほどよろしくお願ひしたい。
- 総合推進会議の公開・非公開の扱いや資料の取扱い等については、資料2のとおりとさせていただきたいので、御了承願ひたい。

資料2について了承。

2 議事

(1) 日本博について

宮田文化庁長官より、資料3～9に基づき、日本博について説明があった。

(2) 意見交換

次に、各委員等による意見交換が行われた。主な発言は以下のとおり。

【小林委員】

- 縄文文化は、日本文化の基盤である。その縄文文化の幕開けは、今を遡ること1万5,000年前頃であり、日本の歴史のプロローグを飾ったのである。縄文人の村の周りには、自然豊かな原（ハラ）が広がっていた。原（ハラ）から食べ物をはじめとする多種多様な資源を手に入れ、そして、まさに自然と共存共生を繰り返してきたのである。この意味においても、この「日本博」の趣旨によくかなうものではないかと思う。
- 縄文の村と原（ハラ）との関係は、実は日本独自のものであり、大陸側には見ることができない。大陸側の村の周りは原（ハラ）をむしろ敵視して、そして征服して農業用の野良（ノラ）に切りかえていくという歴史を始めるの

である。まさに自然と対立するという真逆の歴史を、その後、繰り広げていくという原点を見るわけである。その大陸の村の在り様と日本の在り様とは、まず出発点において大きく変わっている。この文化的遺伝子は約1万年続いた縄文文化を通じて刷り込まれたものであり、その文化的遺伝子とは私は言葉というふうに捉えている。言葉が文化を生み、文化が言葉を生むわけである。

- また、それが故に、日本文化の特徴は言葉の文化の特徴でもある。その中の一つの例として、風はそよそよ吹く。春の小川はさらさら流れる。こういったオノマトペ、擬音語、擬声語、擬態語というものは世界6,500以上の言語がある中でも際立って存在するのが日本語である。これは現在にも通じているものである。自然と日本人の関係というものは、この辺りにもあり、縄文人は縄文人同士の言語活動だけではなく、自然との言語活動を展開していたということをよく物語る一つの証拠ではないかと思う。
- 縄文を象徴するものの一つとして、縄文土器がある。縄文土器は、世界の焼き物としての仲間の一つであるが、独自の道を歩んできた。実は、縄文土器の口の周りには大きく立ち上がった突起がある。この突起は、余計なものというよりも邪魔物である。その邪魔物を敢えてつくっているのが縄文の一つの特徴である。世界各地の焼き物は、サラダボウルを深くしたり浅くしたりという単純な形であるが、むしろ、これは使い勝手にかなうものであり、使い勝手を見捨てた縄文のデザインというものは極めて注目すべきものである。焼き物としての器が使うことを目的としてデザインされたものに対して、縄文は自分たちの思いの丈、世界観、哲学を表現しようとしていたということをそこから読み取ることができる。
- 火焰土器は縄文土器の中の王様である。そういった意味で、オリンピック・パラリンピックの聖火台にいかがかという提案をしているところであるが、それはまだこれから結論が出るものだろうと思う。この火焰土器に寄り添って、もう一つ、似たようであるが違う土器がある。王冠型土器というものであり、この2つが寄り添って1つの世界を表現しているのであり、二つで一つの思想というものである。これは縄文に始まり、そして縄文時代には他にも黒漆と赤漆を塗り分けたつぼがセットで出るとか、あるいはちょうど夫婦茶碗のような同じ形のものの大小とかという、この2つが1つをつくるという特徴を見ることができる。
- これはやがて、尾形光琳の風神雷神にもつながるし、狂言のシテとワキというところにも通ずるものと思う。さらに、狛犬の阿吽。これは阿が始まりで、吽が結末、決着という世界観を表し、あるいは善悪、人の本音と建前という極めて高次元の観念の世界に通ずるものである。こういったものはもちろん、

縄文、日本だけの特徴ではない。人類普遍的な在り様を示すものであり、その一端を縄文、それから、日本文化が担っているという、これは一つの「日本博」の発信の大きな核になり得るものだろうと思う。

【小松委員】

- 長いこと、博物館・美術館を見てきて、やはり情報量、予算、人材などに大変に格差があると思う。特に近年、日本国内で格差が広がっている。人材の交流、あるいは相互の交流ということもなかなか進んでおらず、宮田長官が「日本博」を契機にそういう状況を打破したいと、「日本博」はやって終わりではなく、これが始まりだとおっしゃっていたと記憶しているので、是非この「日本博」を始まりとして、日本の博物館・美術館業界を活性化したい。そういった方向に行ったらいいと考えている。
- もう一つは、日本の工芸であるが、昭和49年以来、特に漆工芸に携わってきたところ、海外では、知っている方はいらっしゃるのだが、ほとんど輸出されたものについてしか接点がない。日本の工芸の精粹というか、最も素晴らしいところについては御理解をいただいているというふうに痛感している。
- これは残念ながら、日本国内においても同じことであり、その点で、この「日本博」において、日本の工芸が作品のみならず、製作現場まで御理解をいただけると大変にありがたいことだと思っているので、是非、その方向で進めていただきたい。

【高階委員】

- この「日本博」を諸外国、日本から東洋のみならず、様々な方が日本に来られる、あるいは日本から紹介するという一つのテーマとして非常に私は中心的になるものとして、宮田長官がおっしゃった「日本人と自然」という考え方が根にある。それは、小林先生がお話いただいた縄文時代以来、日本人にとって自然というものは非常に重要な意味を持っている。
- これは、西洋で自然を写し出した絵画や彫刻というものは、自然そのものを相手にするのは非常に新しいのである。いわゆる風景画と称するもので、これは17世紀頃に成立する。それ以前は物語の背景として風景は描かれたのである。山そのものや自然そのものを描き出すというのは、むしろ西洋では非常に新しい。西洋では人間の様々な事跡、歴史や物語を美術の表現にする。東洋では中国において、もちろん、昔から山水画というものがあり、日本も大変古くからあり、そこに自然への敬いがある。
- 同時に、自然と共に生きることがあり、先ほどもお話があった宗達の風神雷神。これはちょうどジャポニスム2018、パリに先頃展覧されており、

私も行って観てきた。あれは宗達の風の神、雷の神である。それを受けて光琳が同じようなことをやり、その裏に今度は抱一が夏草秋草という自然の風景を描いた。秋風が吹く、それから、雷が鳴って夕立が降るといふ自然のつながりを、これは光琳から今度は抱一に行ったのである。

- そういう自然が非常に身近であり、小林先生のお話の中で、日本の縄文以来、それは日本人の心とつながっているとあった。自然を表すのに森や林がある。森は、普通は木を3つ書くが、木へんに土というものを書くと仙台の杜の都のような「杜」になる。あれは木と土であるから、もちろん土地に根差している。あの「杜」が、木へんをしめすへんに変えると神社の「社」になる。つまり、森を大事にしているのである。
- 山も同様であり、山というものは、実は外国の方が日本に来ていろいろ旅行される。京都へ行くと東山。あそこに如意ヶ嶽がある。それから、大菩薩峠というものがある。こういうものは山が、菩薩様というものは不思議で、ヨーロッパだとアルプスが、これはターナーが書いているように、悪魔の峠というふうに怖いところである。しかし、日本にとっては大事になる。そこから仏様が来るといふ信仰もあって、須弥山というものを大事にしなごら我々は親しみ、かつ大事にしていったといふことがあろうかと思ふ。そのような面を作品美術や演劇を通して知らせていければと思ふ。

【島谷委員】

- 「日本人と自然」といふテーマはこの時期にふさわしく、日本人を示すのに当を得た内容だと思ふている。日本の神々を見る場合、海の神、山の神、それぞれ自然を神として祈りながら日本人は生きていふ。縄文も然りである。その中で自然を愛し、自然を畏怖してあり、そういう意味では防災にもつながると思ふが、そういった気持ちを次世代に伝えていかなければいけないと思ふ。それを踏まえながら、3つのことを提案したい。
- 1つ目は、この「日本博」は日本で行う日本文化の祭典である。日本の若い世代に、参加し見てもらい、次世代に継承する機会となつてほしいといふことである。もちろん、そういう美術の立場に在る人間としては、最大限努力したいと思ふている。
- 2つ目は、日本文化といふものは伝統に基づいた本物の良さがあるといふことである。本物でなければ分からないものがあるが、それを踏まえながら、今、宮田長官から御説明があつた高精細の復元した文化財を使うことによつて、文化財の展示制限を超えた状態で多くの方に見ていただくといふもの。それできっかけを持ち、さらに本物を見ていただいて、多くの外国の方に日本文化を分かりやすく伝える。日本は展示制限があるので、なかなか見られ

ないではないかという指摘もあるが、それを高精細の複製を使いながら理解いただき、さらに本物の魅力を伝えていく。とにかく分かりやすく外国人にも見せていくというのが2つ目である。日本文化というものは多様性があり、物まねが上手だと言われる。和魂漢才、明治になったら和魂洋才とも言われる言葉が示すように、日本人の感性に合うものを参考にしながら日本文化の中に取り入れてきた素晴らしい民族だと思っている。

- 3つ目は、美術展示、舞台芸術等とコラボレーションするというものであり、この「日本博」の特徴としてもらいたいと思っている。今まで別々にやっていたものを一緒にやったり、コラボレーションしたりすることによって、より多くのことが見えてくるのではないかとと思っている。幸い、文化庁が組織改編をして、文化財第一課においては文化財の有形、無形を一緒に扱うようになったり、文化資源活用課というものもできた。今回、日本芸術文化振興会が中心となって運営をしていただくが、そこには美術学芸課の元課長が担当者として赴任し、なおかつ無形も担当するというので、そういったコラボレーションが実現しやすくなるのではないかとと思っている。

【柴山文部科学大臣】

- 「日本博」については、本年6月の総理からの御指示をいただいたことを踏まえて、宮田長官を中心に、関係省庁からの様々な御協力をいただきながら、具体的な検討が進められてきた。その方向性は、今日の宮田長官からの素晴らしいプレゼンテーションでお示しをされたとおりであり、文部科学省としても、これら多様かつ素晴らしい文化芸術を全面的にバックアップしながら、今後の更なる充実と具体化を推進してまいりたい。
- 「日本博」は、東京オリンピック・パラリンピック競技大会の期間中はもとより、その前後を文化の力で彩っていく、史上最大規模のプロジェクトであり、観光行政やクールジャパンを含めた、まさに幅広い関係者の知見をいかに結集できるかということが鍵を握っている。
- また、来年度の政府予算案においては、国際観光旅客税を財源として「日本博」の実施に関する経費を計上いただき、改めて、国土交通省・観光庁に対しまして深く御礼を申し上げますとともに、引き続き密接な連携を図らせていただきたい。
- 本日の会議を経て「日本博」の動きは更に加速していくこととなるが、これは宮田長官のもとで抜本的な機能強化に取り組んでいる新・文化庁の、今後の試金石ともいべきミッションとなるものと考えている。私自身も、文部科学大臣として高い関心を持ちながら、宮田長官と文化庁のかつてない挑戦をフォローしてまいりたいと考えているので、関係各位におかれても、引き

続きの御理解と御協力をお願い申し上げます。

【櫻田東京オリンピック・パラリンピック担当大臣】

- 2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会はスポーツのみならず、文化の祭典でもあり、文化を通じて日本の魅力を発信する大きな機会であると考えている。政府、東京都、大会組織委員会が、文化プログラムを通じて、東京大会の機運醸成に取り組んでいるが「日本博」は文化プログラムの中核となる事業と考えている。
- 「日本博」は、東京大会に合わせて日本を訪れる数多くの方々が、全国に広がる日本の魅力を実感していただく貴重な機会となり、東京大会の成功にとっても大変重要だと考えている。私も、東京オリンピック・パラリンピック担当大臣として「日本博」の成功に向けて、皆様と連携して取り組んでまいりたい。

【平井内閣府特命担当大臣（クールジャパン戦略）】

- クールジャパン戦略担当大臣として、世界がよいと思う日本人の美意識・価値観や、それを具現化する日本の様々な魅力を「日本博」の中で発信し、世界のより多くの人々がそれらに共感することを目指してまいりたい。
- また、今回の「日本人と自然」という総合テーマは大変素晴らしいと思う。私は、具体的には伝統文化やポップカルチャーなど、日本の幅広い魅力を、縄文から現代に至る悠久の歴史や、風土・自然といった背景に沿って、世界の人々が共感するストーリーで、効果的に発信したいと考えている。また、世界の人々だけでなく、私たち自身、日本人自身が日本の魅力を再認識できるようにすることが非常に重要だと思っている。
- なお、発信に当たっては、デジタル技術の活用や、発信する相手に訴求するメディアツールの活用も検討すべきだと思っている。関係省庁と密に連携して進めていきたいと思っているので、御指導のほどよろしくお願いしたい。

【鈴木外務大臣政務官】

- 現在開催しているジャポニスム2018がまさにこれに当たると思うが、文化交流事業の継続的な実施は外交関係の増進のみならず、訪日観光客の増加にも資するとの認識で、外務省としても「日本博」に向けて、戦略的に日本文化事業を実施する予定である。
- 今、欧州等で所蔵・展示されている日本の美術品等を里帰りさせて、そして「日本博」に合わせて日本国内で展示することも考えられると思っている。
- 例えば、デンマークでは現在、日本刀のつばや日本の古い小判等が数多くコ

レクションされているというふうに聞いており、なかなか日本では見られないものが海外で見られることもあると思う。日本の美術品等の里帰りを実現させることで、武具や日常用具であっても美術品という高みに昇華させる日本の素晴らしさを、これは日本人も含めて再認識することができるので、是非とも、この点についても御検討いただければと思う。いずれにしても、皆様の御指導、これからもよろしくお願ひしたい。

【工藤国土交通大臣政務官】

- 観光は地方創生の切り札、成長戦略の柱であり、2020年訪日外国人旅行者数4,000万人、地方部での外国人延べ宿泊者数7,000万人泊等の政府目標達成に向け、全力で取り組む必要がある。「日本博」は我が国の文化芸術を振興し、また、その魅力を発信する取組であるが、我が国の文化は外国人旅行者の関心が高い観光資源の一つである。
- 2020年には東京オリンピック・パラリンピックが開催され、世界から我が国が注目される中、「日本博」関連事業を全国で展開することは、オリンピック等との相乗効果、文化に関心を有する外国人への発信力の向上により、訪日外国人旅行者の増加や地方誘客につながるものと考えている。
- 国土交通省としては「日本博」の成功に向け、文部科学省をはじめとする関係省庁と協力するとともに「日本博」を観光戦略に最大限活用し、2020年以降も見据えながら、①JNTO（日本政府観光局）による訪日プロモーションの展開、②文化財の多言語解説の充実など観光資源の魅力向上、③ストレスフリーで快適に旅行できる環境の整備などといった取組を強力に推進することにより、訪日外国人旅行者の増加、地方への誘客につなげ、政府目標の達成に向け全力で取り組んでまいりたい。

3 総理発言

（報道関係者入室）

安倍内閣総理大臣より、以下のとおり発言があった。

皆様、本日は年末の大変お忙しい中、日本博総合推進会議に御出席いただきましたことを厚く御礼申し上げます。

過日、本当に突然に、この「日本博」構想の最大の功労者であった津川雅彦さんの訃報に接することとなった。数多くの皆様の多大な御貢献をいただき、イタリアの日本仏像展からジャポニスム2018へと続く、一連の大きな成果が打

ち立てられようとする矢先のことであり、言葉では言い表せない寂しさが、今も私の心の中にあるわけであるが、その津川さんが繰り返しおっしゃっていたことであるが、これらの取組の集大成として、世界の関心が集まる東京オリンピック・パラリンピック、2020年に世界中の人々が日本に来て、全国各地で日本の美を体感できる「日本博」を是非開催したいというものであった。私としても、我が国の文化、そして美が世界の至るところに発信され、より深い理解につながっていく、言わばその集大成として、この「日本博」を位置づけたいと考えている。

幸い、ジャポニスム2018はたくさんの方々から足を運んでいただき、我々の予想を上回る大盛況となり、大成功裏に現在も開催されているというふう思うが、「日本博」は総合テーマである、先ほども御意見を賜ったが「日本人と自然」のもとに、縄文時代から現代まで続く日本の美を各分野にわたって体系的に展開することを試みる、これまでにない幅と奥行きを持ったプロジェクトとして進めていきたいと考えている。

本日、委員の皆様から、それぞれの知見に基づき、貴重な御意見をいただいた。ありがとうございました。引き続き、御協力いただきますよう、よろしくお願いしたい。

本日御議論いただいた方向を踏まえ、文化庁が中心となって、各関係府省が連携し、関係企業・団体の協力も得ながら「日本博」の開催に向けて万端の準備を進めるよう、お願い申し上げます。

(報道関係者退室)

4 閉会

(以上)